嫌煙家

朋次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
嫌煙家

【Ｎコード】
Ｎ５６２７Ｑ

【作者名】
朋次郎

【あらすじ】
おいしいケーキに幸せを感じる方はきっとわかってもらえると思う。

前編

詩織は嫌煙家である。煙草の煙がどうにも嫌いだった。
生理的にだめだった。これは小さいときからだ。
実家でたばこを吸う人がいなかったからでもあるし、身近な近所のおじさんや親せきにも煙草をたしなまない人がほとんどであったからでもある。そして自分は生まれつき匂いに敏感なせいもあろう。
煙草の煙ときたら、もう！鼻につく刺激性のにおいと、のどをさす、あのつかみどころのない煙。本当に大嫌いであった。そんなわけで詩織のまわりでは詩織は大の嫌煙家で通っていた。
学生のうちはそれですんだ。社会人になってからも勤務先が歯医者さんの助手だったので煙草とは縁がなかった。もちろん親しい友人で煙草好きな人もいなかった。
詩織は２７歳で見合いで結婚。すぐに妊娠した。

さて話はここから始まる。
詩織が選んだ旦那はもちろん煙草を吸わない人だった。それが決めてでもなかったが、見合いの時の仲人に釣り書を渡すときには「煙草を吸わない人、お酒は飲んでもいいけれどほどほどに、」という程度の希望は通してもらった。旦那は大人しくて朴訥で可もなく不可もない人である。穏やかながらも楽しい新婚生活だ。
ただ姑がちょっとわがままで勝手に家にあがりこんだり、自分の話を、いや自分だけがおもしろいと思っている話をずーーーっと話してきかせたりする。独身の小姑もセットでくっついて家の中の掃除のやり方だのささいなどうでもいいことで嫌みを言ったりする。それでちょっとこの頃結婚生活に嫌気がさしたりするが、まあ旦那はまあまあいい人だから・・。赤ちゃんが欲しいので妊娠したし・・。だがこの話には旦那や家庭環境は関係ないので省略させてもらう。

そう、結婚して半年。今詩織は3か月の身重だ。つわりはあるが、幸い重くはない。みそ汁やご飯の炊ける匂いはだめで食べたくもないが、アイスクリームや果物で十分しのげる。それに大好きなケーキなら、いくらでもOKだ。親しい友人に水すらはいてしまう重症のつわりになって入院した人がいるから自分は大したことがないと思う。

ある朝、いつものように旦那を会社の送り出した後、ゆっくりと台所をかたづけその後新聞を読む。今日は姑は社交ダンスの日でここには遊びに来ないし、小姑は宝塚観劇とやらで今日は絶対に来ないだろうし。ゆっくりできる。

詩織ははずんだ気持でいた。新聞と一緒に、岡島屋百貨店のちらしが入っていて久々に行ってみようかと思いたつ。

実はその百貨店の3階にはアルア・アイという喫茶店が入っている。詩織は独身の時からそこのタルトタタンが好物だった。それとカモミールティーをセットで頼む。たかが喫茶店とはいえ、豪華なソファやシャンデリアがぶらさがっていて高級感たっぷりのインテリアが気に入っている。ゆっくりとくつろげるように配慮されているのがわかる。出される食器もすべてウェッジウッドで統一されている。

当然そこでケーキセットを頼むと高くつく。でもたまにはぜいたくしたっていいだろう。子供ができてしまうとこういうお店では歓迎されなくなるし、今のうち、今のうち。

「そう、家に閉じこもってばかりいちゃだめね。たまには外でゆっくりお茶しよう」

そうして目当ての買い物もすませ、最後のお楽しみにとっておいたアルア・アイに入店した。本当に久々に来れてうれしい。結婚以来はじめて来たはずだと思う。平日の昼下がりと言うのに結構混んでいる。詩織は奥のソファの席が埋まっているのをみてがっかりし

た。あそこが一番くつろげるのだ。でも席がふさがっていては仕方がない。タルトタタンとカモミールティーがあればよしとしよう。
ウェイトレスに喫煙席か禁煙席、どちらを望むか聞かれる。詩織は当然のように禁煙席を望んだ。禁煙席はほとんど満杯で喫煙席に一番近い席しかなかった。しかし、しきりがあってやや大きめのテーブルの上に涼しそうなファイバーグラスの花束がふんわりと広がるようにして隣の喫煙席が見えないようにしつらえてある。
「これなら、まあいいか」
詩織は座った。座って見るとファイバーグラスの花の光の加減かキラキラと光ってとても綺麗。詩織は上の階で購入したばかりの文庫本をテーブルに置いてその万華鏡のような光を楽しんだ。
「あたしのお腹にいる赤ちゃんもこれを綺麗とおもっているに違いないわ」
まだ膨らんでいないお腹をさする。
やがてタルトタタンとティーのセットが運ばれてきた。紅茶ポットにはカバーがかけられていて冷えないようにしている。カップもちゃんと温めてある。詩織は満足感をもって優雅な動作でお茶を入れた。一口すすってからタルトタタンにかかる。
ここのタルトタタンは信じられないくらいに薄く切られたアップルが何百層にもなって歯触りがよい。ラム酒の匂いをふりまきながら妙なる美味に酔える。下のクッキー生地も少し厚めでアップルとクッキーの境目には薄くアーモンドとチョコレートがはさまれていてその香ばしいこと！
甘い甘いケーキを少しずつ味わいつつ、少し濃いめに入れたカモミールティーをすする。楽しい自分だけのティータイムだ。
「独身の頃はこんな有閑マダムのようなことはできなかったなあ。いつも給料日の後行くくらいで」
詩織は独身の頃からアルア・アイのようなおいしいケーキを食べさせる喫茶店に1人で入るのが好きだった。気に入りの作家の新刊が出たらそれを持ち込んでゆっくりと長居させてもらう。静かな1

人だけの至福の時間だ。
　しかし結婚していわゆる専業主婦になったからと言ってもおいそれとは外には出れない。出ても近所のスーパーか図書館ぐらいか。旦那は普通のサラリーマンだし経済的な事もある。ケーキセットははっきりいってぜいたく品だ。
　だから本当に電車賃を使ってここまで来たのは久しぶりだ。至福のケーキセットをゆっくり味わいながら本を読むつもりだった。ケーキに丁寧に巻かれた銀紙をこれまた丁寧にフォークをつかってゆっくりとはがすこの喜び。はずんだ気持だった。
　しかし何と言うことだろう！隣の喫煙席から煙草のにおいがしてきたのだ。詩織は顔をしかめた。すごくきつい匂いだ。むせるような変わった煙草の匂い。紅茶のハーブの微妙な香りをぶちこわすこの匂い。耐えられない。席を変えてもらおうと見回すがあいにくと禁煙席はもういっぱいだった。
　詩織は顔をしかめたまましきりにある花瓶越しに隣の喫煙席をそっと覗いてみた。そこには1人の老人が座っていた。彼の服装や顔まで覗きこむようなはしたない真似はしなかったが煙草ではなく葉巻を吸っていることまでは確認できた。葉巻の方が煙草の何倍も匂いがきつい。不快感でいっぱいになった。
　こんな静かな喫茶店で葉巻を吸うなんて！
　一体どういう神経をしているのかしら！
　紅茶とケーキの微妙な香りと味がわからなくなっちゃう！
　エスカレーター上で煙草を吸ったり赤ちゃんがそばにいても煙草を平気で吸うバカと同罪だわ！
　詩織は不快な気分とともにケーキセットをたいらげた。ケーキは文句なしにおいしかったが、その何割かが葉巻の煙のせいで満足感が消失したのは確かだ。
　いざゆっくり本を読もうとしてもどうしても煙が気になって集中できない。あの老人はきっと灰皿に葉巻の吸い殻を山盛りにしているに違いない。詩織はとうとう本に集中することをあきらめた。本

を閉じて帰り支度をする。レジに向かい支払いをすませる。すると、その老人もレジに向かうではないか。
「なんだ。もう席を立つなら、もう少し我慢すればよかった・・」
詩織はがっかりしたが支払いがすませてしまったので戻れない。やれやれせっかく来たのに、ついてないなあ。老人に思いっきりちら、と冷たい視線を走らせてから下りのエスカレーターに向かった。

「ちょっと、お嬢さん、お嬢さん、」
詩織の背後から誰かが呼びかけている。しわがれた低い声だった。詩織は自分のことと思わなかったので振り返らなかった。しかしあの不快な葉巻の匂いが漂ってくる。しかもそれはだんだん近寄ってくるではないか。眉をよせて詩織は振り返った。するとあの葉巻を吸っていた老人が詩織を追いかけてくるではないか。
「やあ、さきほどはすみませんでしたな。そんなに煙草がお嫌いとは思わなかったので」
詩織はレジのところでした自分の冷たい一瞥で老人は自分が睨まれた理由がわかったのだろう。それにしては今も葉巻を手にしている。吸ってはいないが灰が磨かれた床にぱらぱらと落ちた。なのに老人は頓着なく詩織に近づいて歯のない口で笑いかけるのだ。眼は灰色で顔の造作が粗く、何となく日本人ではないような気もした。背は詩織よりもずっと高く、身なりはよい。素人の詩織が見ても上質な生地のスーツをきている。が関係のない人だし、お近づきにもなりたくない人だ。
「あの、失礼します。もう気にしていませんので」
詩織は軽く会釈して、エスカレーターを続けて下りようとする。老人は構わず詩織の後ろについてエスカレーターに乗りこむ。葉巻のにおいが背後から詩織の鼻を刺激した。
「いやだ、このおじいさん」
詩織はむかついてきた。この老人は変質者かもしれない。もっと人の多いところに行かねば・・。詩織はさっさと1階まで行って正

面入り口のインフォメーションセンターのカウンターのところまで直行した。案内嬢が詩織に向かってにっこりとほほ笑んだ。「はい、何か？」

詩織は適当に案内嬢をあしらい、傍らにある店内案内のパンフレットを手に取る。ここまではさすがに人目もあるしついてこないだろうと振り返ったが例の老人はまだいる。老人は案内嬢やまわりの客が気にならないかのように詩織だけを見て近づいてくる。

「やあ、あなた。そんなに私の煙草が気に入らんですか」

詩織はかっとなった。ここなら怒鳴っても大丈夫。私に危害は加えられないだろう。

「煙草ではなくて葉巻でしょっ。あなた、なんですか。さっきから私の後をついてきて！いい加減にしてください！」

老人は素直に言った。

「いや、失礼は承知です。あなたの心を覗いてみればここまで煙に嫌悪感をもっておられるのはめずらしいのでな。本当に悪いことをしましたな」

「だって私は煙にむせてしまうのですもの！さっきだってせっかくの紅茶の香りがパーになったし、でもいいですからもう付きまとわないでください！」

詩織はそこまで言って、はっとした。堅い床がいつのまにかふわふわしている。下を見ればヒールのかかとが土にめりこんでいる。

そんなバカな！

詩織はあわてて見回した。まわりの状況が変わっている。見慣れた岡島百貨店のレイアウトや大勢行きかっていた客が1人もいない。

詩織はどこかの庭園にいた。

「いやだ。ここはどこなの？」

「驚かせて申し訳ない。さっきの罪滅ぼしにおもしろいものをお見せしようと思いましてな」

老人はあくまで物腰が丁寧だった。しかしパニックになった詩織には当然通じない。

後編

「私をどうしようというの！
ヘンタイ！アクマ！早く元に戻してよ！」
「お嬢さん、大丈夫ですよ。ここはいいところですよ」
「いや、いや、いや！早く元の場所に戻してええええ！」
詩織は泣き伏した。ひんやりとした土と草の香りが鼻をくすぐる。老人はそのまま泣き伏す詩織にはさわらず、じっと見下ろしているようだ。
ひととおり泣くと、詩織はそっと頭をもたげてあたりを見回した。さっきの老人は大理石？でできた見事な彫刻像に寄りかかって葉巻を吸っている。葉巻の匂いを詩織はかがなかった。そよ風がどこからか吹いている。詩織は老人が自分に匂いがかからぬように配慮しながら風下に立って葉巻を吸っているのがわかった。
詩織は立ちあがった。泣いてもどうにもならないことに観念した理解したのだ。それにこの老人が自分に危害を加えないだろう、と思ったのだ。
立って再びあたりをそっと見回した。空気がなかなかおいしい。足元の土の上は一面芝生できちんと手入れされ刈り込まれている。清潔な庭園だ。
西洋で見られる貴族の館の庭園の一角のようだ。トピアリーだったっけ。そんな名前の様式の・・・。
どこかで鳥の鳴き声がした。詩織はそっと老人に近づいた。
罵倒した言葉は訂正せずでも今度は丁寧な言葉遣いで聞く。
「あのう・・ここはどこ？」
老人は葉巻を口からはずした。
「さっきのおわびです。ここはわしの屋敷でな。あんた、ああいう喫茶店が好きなんじゃろ？西洋のケーキや紅茶、食器類がお好きなようで、１つごちそうしてやろうと思いましてな」

老人は淡々と言った。詩織は面食らった。
「おわびなんかいらないから、私を元に戻してください」
「いやいや、お嬢さんが食べたものよりも、もっとおいしいものを食べさせてあげますよ」
老人は先に立って歩いた。少し歩くと、丘陵が広がる丘に出た。見晴らしがいいなあ、と思わず見とれていると、すぐ後ろにツタの絡んだ屋敷があった。
どこかの写真集で見たようなヨーロッパの古城である。中世の石でできた堅牢な城。でも古びてはいない。新しい。
老人は詩織に入ろう、と案内する。詩織は仕方なしに入った。
天井がいやに高い食堂に案内された。こんなに広くて大きいのに中には誰もいない。部屋はステンドグラスの窓で照らされ、幻想的な光景だ。
「まあ、すてき・・・」
詩織はうっとりした。
「座りなさい」
老人は慣れた動作で椅子をひいてくれた。３０人はゆうに座れる細長いテーブルに、何種類ものケーキがホールのまま、またお茶のセットも置いてある。
食器類はどこのブランドどころか全部銀製だった。鈍い光を放つカップを持ちあげてみる。ずっしりと重いそれは、すでに心地よい温度に温められている。紅茶をそそがれ匂いがかいでみる。
アールグレイティーだった。それもごく上等の！
老人は初めて葉巻を灰皿（もちろん銀製で重そうで立派な彫刻付き）に置いて、ホールケーキを切り分けてくれた。細い一切れずつ、何種類も切り分けてくれる。他には客もないのに、老人も食べるようでもない。
普通だったら詩織は警戒して食べなかっただろう。でも雰囲気に酔ったように手を出してしまう。アールグレイのベルガモットの匂いとケーキの香ばしいような甘いようなお酒のような匂いに酔って

しまったのだ。
　詩織は銀皿に盛られたそれらをゆっくりと味わい、食べた。タルトやパイが多い。それも洋酒が効いてごく甘いもの。あっさりしたもの。スパイスが効いたもの。いろいろあった。ティーもミルクも砂糖も入れずに味わう。老人はにこにこして詩織が食べる様子をみていた。
「おいしいですか、おいしいでしょう。さっきはすみませんね。私がお嬢さんの給仕をしている間は、葉巻を吸いませんからゆっくり味わってくださいよ」
「はあ・・・」
　老人はにこにこしている。
「おや、あなた。普通の体ではないですね。今は何カ月ですか」
「3カ月です。あの、どうしてわかったのですか」
「ああ、私は多少、わかるのです。その辺の人間のことは、ね」
「・・・」
　どうみてもこの老人は普通の人間である。ただのおじいさん。一体どうしてわかるのだろう。それにアルア・アイのような喫茶店に行かなくともここに住んでいるならここで好きなだけケーキやお茶が飲める境遇なのに、どうして。
　詩織の心を読んでいるように老人は言葉をつなぐ。
「確かにここは私の屋敷です。でもまったくの1人暮らしなんで時々退屈してしまいます。こういうときはやたら人間の多い駅や店の中をうろうろしたり、今日のように百貨店に行ったり、お祭りもいいですな。わしはどこへでも行こうと思えば行ける身分ですが、遊ぶならば日本が一番安全ですからなあ」
　詩織はタルトをほおばりながら聞いていた。このタルトははじめて食べる味わいだ。ゴーダチーズの塩味がすごくあってそれでいて脂っこくない。一体どうやったらこんなにおいしくできるのだろう。アルア・アイのタルトは最高だがそれを上回る味わいだ。それに、どうやらこの老人は悪い人ではなさそうだ。私はきっとおとぎの国

にでも入り込んだのだろう。
　これは、夢。きっと夢に違いない。タルトはおいしいし、紅茶は香り高く温かい。食べ物は現実だ。しかし今ここにいる状況は夢なのだ・・。
　やがて詩織はお腹がいっぱいになった。ころ合いを見計らって老人が言った。
「さて、お嬢さん。あなたもう、帰りますか。それとも少しここを見学しますか？」
　詩織は迷った。戻ればまた退屈な日常が待っている。どうしようかな、もう少しここにいてもいいかな・・・。
「あの、ここは一体どこなんですか」
「それは言えん」
「あなたは、誰？」
「ただの葉巻好きな老人さ」
「まあ、人をバカにしていらっしゃるのね。やはり私は帰ります」
「さきほどの私の無礼を許してくれるかね」
　詩織は上機嫌でうなづいた。
「まあね、でも今度から人ごみやああいう喫茶店の中では気をつけてくださいね。世の中は煙が嫌いな人もいますから」
「はい、わかりました。お嬢さん」
　老人はあくまで物腰が丁寧だった。詩織は自分で重い椅子をずずっと引いて立ちあがる。
「やっぱり元の場所に戻してください。もう帰らなきゃ」
「その前にもう1つ。そのお中の子供、男の子だよ。わしにはわかる。その赤ちゃんが産まれたらお祝いに伺ってもよいかね」
「・・・・」
「その時にその子がわしにもらえたらもっとうれしいのじゃが」
「私、帰ります。元に世界にもどしてください」
　老人は言葉を継いだ。
「赤ちゃんと離れがたいのなら、お嬢さんもここに住んでよろしい。

生活には不自由はない。今のお嬢さんの目には見えずとも、ここには使用人が大勢いるからのう」
「帰してくださいっ」
詩織は激昂した。タルトなんか食べなきゃよかった。意地汚く食べてしまった。何か入っていたらどうしよう。混乱状態で詩織は出口とおぼしき重そうな扉を開けようとした。でも扉が開かない。そんな、と詩織は半泣きになった。老人は詩織の行動を黙って見ていた。
「戻してよ、元に戻してよ！」
老人はわかった、というふうに両手を挙げた。
「いたしかたなし、あなたとはご縁がありませんな、では、」
詩織はめまいがした。
と、気がつけばさっきの岡島百貨店のインフォメーションセンターにぼーっとして突っ立っていた。案内嬢が怪訝そうに詩織の顔をのぞきこんでいた。
「あの、お客様、大丈夫でしょうか？ご気分でもお悪いのでしょうか」
詩織は元に戻ったのだと思って安心した。せいいっぱいの笑顔で案内嬢に大丈夫です、と礼を言った。

老人の姿はどこにも見えなかった。
あれが白昼夢というものかしら？詩織は無事電車に乗って家に帰ったが、靴を脱いではっとした。ローヒールの靴のかかとには泥と芝生がくっついていたのである。では、あれは、夢ではなかったのかしら？
詩織は老人が一体どういう人か、何を考えていたのか気味悪く思った。あんな状況でお腹いっぱいタルトを食べてしまった自分のおろかさが腹立たしい。しばらくアルア・アイの喫茶店にも足は向かないだろう。本当に世の中には何がおこるか、何がいるかわかったもんじゃない。

私の赤ん坊をくれ、ですって？ねえ？
だが詩織は夫にはこの話をしなかった。夫はいつも仕事で疲れて帰ってくるから。帰りの時間もおそいし朝は早い。詩織はご飯の支度とお弁当の用意をするだけの妻である。
結婚したという実感もわかない私・・。まだ膨らんでいないお腹をさすりながらつぶやく。パニックにはなったけれど、あのまま老人のいうとおりにあの豪華なお城にいたら、どうなっていただろうか。
私は毎日あのおいしいタルトとお茶をいただきながら、暮らしているのかしら。
あの匂いのきつい葉巻さえ我慢すれば、豪華なお城にお姫様のように住めたのかしら・・？
大勢の使用人にかしずかれて・・・？
我慢といえば、お金。近所づきあい。わがままな姑の相手。小姑のイヤミ。
自分はチャンスをのがしたことになるのかな、と思った。靴の泥を落としながら詩織は唇をかみしめる。

次の日、大きな包みが自分宛てに届けられた。差出人の名前がなかった。しかも国際郵便だった。だが国名がかすれて発送場所が読めない。いぶかしみながら中を開けると、1枚の絵画が出てきた。あのお城の内部が書かれた油絵だ。中央のテーブルには詩織が食べた覚えのあるタルトとお茶、食器類が整然と置かれている。人間は描かれていないが今にもお茶の時間に盛装した紳士淑女が連れだって現れそうないい雰囲気のある絵画だった。そしてメモが一切れ。
「きのうはすみませんでした。これはせめてものおわびです。元気な赤ちゃんを産んでください。葉巻の老人より」
これだけ。
詩織はじっと絵画を見つめていた。玄関先に座り込んでいつまでも放心したように見つめる。それから寝室にそれを飾った。狭い寝

室にその絵画は不釣り合いに立派に見えた。姑や小姑が来たらきっとこれを見て嫌みを言うだろう。

「これ、いくらしたの？どうしてこんなものを飾るの？だったら私の作った木目込み人形でも飾れば？この間あげたばっかりでしょ？どうして飾らないの？」

私が何を言われても笑っている夫。姑の言いなりな夫。マザコンだったなんて知らなかった。いい人なんだけど、本当につまんない男。

詩織は目をつむってお腹をさすった。もしこの子が生まれたときに、あの老人がお祝いに来てくれるかもしれない。葉巻の匂いも我慢しよう。そう、慣れればどうってことのない臭いだわ。

そしてあの申し出をもう1回言われたら今度は受けるかもしれない。

詩織は壁の絵画をいつまでも見上げてタルトとお茶の味を思い出していた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5627q/

嫌煙家

2011年2月3日04時40分発行